

『夜の寢覚』論

——女一の宮の人物像——

序論

『夜の寢覚』において、女一の宮という女性が登場する。老閑白等と同様に中巻欠巻部分にて登場するこの女性は、『夜の寢覚』の女主人公（以下、女君）との関係が思うようにいかず傷心する男主人公（以下、男君）が心慰むこともあるかと思ひ通うようになった朱雀院の娘である。本文中での彼女の描かれ方は非常に特徴的である。皇女であり、気高く理想的な女性として描かれる女一の宮であるが、彼女自身が本文中の登場する回数は数えるほどしかなく、ほとんどが間接的にその存在を語られるのみなのである。女一の宮を妻に迎えた後も、男君の女君を想う気持ちは一向に薄れない。しかし、物語が進むにつれ、それに近い愛情を女一の宮にも抱くようになるのである。そのような女一の宮に焦点を当てて論じてみたいのだが、『夜の寢覚』の登場人物を語る上で、無視することができないのは、『源氏物語』の存在であ

ろう。『源氏物語』に強い影響を受けたこの作品は、当然、至る所にその引用が為されている。故に『源氏物語』における登場人物の描写や、その人物の置かれた立場、状況などと比較することによって、『夜の寢覚』に登場する人物をより深く理解することが可能となるだろう。そこで、女一の宮という人物像を鮮明に浮かび上がらせるため、『源氏物語』に登場する三人の女性について考察したいと思う。それぞれ、女三の宮・葵の上・紫の上の三人である。後者ほど、源氏の愛情が深かったと考えるが、三人とも源氏の正妻（あるいはそれに相当する扱い）の座に着きながら、様々な事情によって悲運と呼べる運命に翻弄された女性たちである。性格・立場・境遇など三者三様のこの三人であるが、『夜の寢覚』における女一の宮という女性は、不思議と彼女たちのことが想起されるような一面を持つ。『源氏物語』におけるこの三人の扱いと、『夜の寢覚』における女一の宮の扱いを比較することで、女一の宮の新たな一面が浮かび上がるのではないだろうか。以下にその考察を深めていきたい。

両坂昭彦

第一節 女三宮との比較

『夜の寝覚』の女一の宮と、『源氏物語』の登場人物との比較において、女三の宮の存在を挙げぬわけにはいかないだろう。皇女という高貴な出自であり、共に父親である院からの愛情も深い。女君のことが気になりながらも、朱雀院に氣を遣つて、女一の宮のことを蔑ろにできないというジレンマに陥る男君の様子は、しばしば先行研究において光源氏と比較される。

またそれぞれの女性を妻に迎えるいきさつも似通っているところがある。『夜の寝覚』では女君との関係が思うようにいかず、男君は傷ついた心を慰めようと女一の宮に近づいた。それに対して、『源氏物語』では女三の宮の降嫁について、源氏は身を焦がすほど思い人であり、叶わぬ恋の相手であつた藤壺の宮の影を、血筋の点からまだ見ぬ女三の宮に重ねたという背景がある。このように立場や境遇という点では似通っている二人だが、彼女たち自身を描かれ方には大きな差がある。まず、『源氏物語』の若菜巻における女三の宮の描写について考えてみよう。

女三の宮の描写には「幼し」「うつくし」「らうたげなり」などの記述が多くみられ、彼女の幼さ、子供っぽさの強調に終始しているといえる。「おいらかなり」「あえかなり」といった表現なども、女三の宮のおっとりした幼い印象に拍車をかけている。また、女一の宮の形容に見られる「氣高し」「うるはし」といった

表現も見られない。他の登場人物の視点を通じて度々女三の宮の稚拙さについては言及されている。さらに、女三の宮は「限りなき人」といわれる身分であるにもかかわらず、他の登場人物と比較したうえで、劣っているといわざるを得ない描写までされている点については注目に値するだろう。例えば、彼女の降嫁によつて自身の立場が危うくなり苦心する紫の上が、女三の宮より明石の君との対面に重きを置く場面などは印象的である。女三の宮のそのような子供っぽい有様に幻滅した源氏は、紫の上という人がいながら彼女を妻として迎えたことをはっきりと後悔している。

これに対して、『夜の寝覚』の男君の場合はどうであろうか。「なぞせしわざぞ」(三三三頁)²⁾「など、せしわざぞ」(四八〇頁)のように、女一の宮と結婚したことを後悔する描写も確かにあるのだが、これは直前に「大皇の宮のあまりなる御もてなしに從ひ、心よからぬ御後見どもの物言ひ、心ばへぞ、いとむつかしく」(四八〇頁)とあるように、後悔の原因は女一の宮以外のところにある。そして、男君は女一の宮自身のことについては次のように思っていた。

御心ばへ、けはひの氣高き、手うち書きたまへるさまは飽かぬことなく、「我が契り、宿世、口惜しからざりけり」と思ひ送らるるを、

(四八〇頁)

まさに女三の宮とは正反対といえる描写がされており、女君のことを強く想っているとはいえず、この女一の宮に対する男君の心も、決して並一通りではない様子がうかがえる。

このように、一度は源氏自身も興味をそそられながら、女三の宮の幼さ・未熟さ故にほとんど描かれることのなかった、皇女の魅力。即ち、血筋故の高貴さや、それに伴う教養の深さなどを表現することによって、『夜の寝覚』の女一の宮は、直接的な描写は僅かしかなくとも、ことあるごとにその扱いの大きさと存在感を讀者に示すことに成功しているのである。

第二節 葵の上との比較

次に挙げるのは源氏の最初の妻、葵の上である。加冠の大臣が皇女との間にもうけた一人娘で、血筋的にも高貴な、気位の高い女性として登場する。夫婦間のすれ違いをはじめ、その面持ちや物の怪にとりつかれる一件など、女一の宮と似た部分の多い人物である。

葵の上の描写において重要なのは、各所に女一の宮の描写と類似した表現が見られる点である。例えば、「気高し」「うるはし」など、女一の宮にもよく見られた形容がされており、それぞれが持つ女性としての魅力が似通っていることを表している。

また、次の場面で用いられている「さうさうし」の言い回しにも気をつけたい。

おほかたの気色、人のけはひも、けざやかに気高く、(中略)あまりうるはしき御ありさまの、とけがたく恥づかしげに思ひしづまりたまへるを、さうさうしくて、

(帚木 九一頁)

気高く、美しく、常に整然としすぎているが故に、源氏は葵の上に向ちとけにくく、夫としてそれが物足りないと感じている。この場面と比較したいのが、男君が女君のもとへ行くことについて弁明する際の、女一の宮の態度についてである。

なほさべき御答へはあるべきを、ただうち背きておはします。「宮たちは、ただかうぞ、事もなく、あてにおはしますべきぞかし」と、本意ある心地するものから、あまりさうざうしきも、ものをおほし知らせたまはぬにはあらず、あくまで心深く、気高さの過ぎさせたまひて、何事も世づいて答へむは、うたておほしめすべし。おほろけならでは、差し向かひきこえたまふこともなきを、かしこまりおきたてまつりたまひて、いたくうちとけては馴れ申したまはずなどぞありけり。

(五〇九―五一〇頁)

この態度は、『無名草子』にも「女一の宮の御心もちひ、有様こそめでたけれ」(二二九頁³)と評されるほどのもので、妻として模範的とすらいえる振舞い方だと言えるだろう。男君の弁解に対

し、女一の宮は並の女のような応酬などせず、静かに顔をそむけたままでいる。その様子が皇女としてあるべき氣品を漂わせていると思ふ反面、やはり男君は「あまりさうさうしきも」、つまり夫としての物足りなさを感じずにはいられないのは、まさに皮肉な結果であり、女一の宮と葵の上の大きな共通点なのである。

次に興味深いのは、若紫巻において、源氏との間の氣まづい空氣の中、葵の上のことをまるで絵に描いたお姫様のようだと述べた上で、その並々ではない美しさと氣高さが重ねて強調されているのだが、この直後には、「この若草の生ひでむほどのなほゆかしきを」（若紫 一二七頁）と、源氏の関心は若紫のもとへと移つてしまふ点である。これは『夜の寢覚』において度々見られる、女一の宮のこゝろを持ち上げる描写をしておきながら、その後男君の心が女君へと向かうことによつて、女君の特異性を強調するという方法に通じる。同巻の別の場面においても、源氏が葵の上に対して、不足や不満に思われるような欠点があるわけではないとはつきり述べている。さらに、ほかのどの女性よりも先に逢つた女性なのだから、いとしく大切に思つており、他の愛人に比べて格別な人であるという源氏の氣持が書かれているのだが、その直後には、「幼き人は、見ついたまふまに、いとよき心ざま容貌にて」（紅葉賀 三一七頁）と、やはり紫の上についての描写がされる場面に切り替わつているのである。

容姿や態度に対する形容。物の怪に憑かれるという一件。物語が進むにつれて増していく愛情。そして、並々ではない美しさ故

に与えられた、女一の宮は女君の、葵の上は若紫（後の紫の上）の持つ魅力を引き立てる役割。皇女という立場上、『源氏物語』の女三の宮と比較されることが多い女一の宮であるが、人物像や物語上の展開を考へるならば、このようにむしろ葵の上との共通点ほうが多く挙げられる。

それでは逆に、この似通つた特徴を持つ両者の異なる点とは何であるのか。女一の宮と葵の上の間に、二つの大きな相違点があると考へる。まず一つ目は、それぞれの夫に対する態度である。自分が四歳年上である氣恥かしさや、源氏の女性關係のことなどもあり、葵の上が源氏との子供を身籠るまでの二人の夫婦關係はあまり良いものではなかつた。特に、しばしば夫である源氏と対面しようとしてもしい葵の上の態度には問題があると言わざるを得まい。先述した女一の宮の態度と比べると、理想的な妻とは言ひ難い。

そして二つ目は、物の怪に取りつかれた後のことである。源氏との子供（夕霧）を出産後、葵の上は物の怪（六条の御息所の生靈）にとり殺されてしまう。それは、ようやく夫婦の間のわだかまりが解け始めた際に起こつた悲劇であつた。病氣の看病や出産を通じて源氏の愛情が深くなつてきたのも束の間、葵の上は物語から姿を消してしまふ。そこからは、紫の上一人に源氏の格別な愛情が注がれることになるのである。一方、『夜の寢覚』では、巻四の生靈事件の後、巻五では男君の、女一の宮に対する以前よりも愛情が深まつた様子が描かれている。また現存する巻ではそ

れ以後、女一の宮が急死したり、男君の愛情が薄れたりするといった表現も見られない。

葵上と女一の宮。似た特徴を持つ二人の女性の共通点と相違点を並べて考えてみることで、『夜の寝覚』における女一の宮の魅力と扱いの大きさを、客観的に把握できるのだ。

第三節 紫の上との比較

最後に挙げるのは、紫の上である。『源氏物語』において、葵上の死後、事実上の正妻として扱われ、源氏の愛をほぼ独占するが、女三の宮の降嫁により、その立場に悩まされることになる。この二人目の妻という立場が、女一の宮と共通している。男君にとって最初の正妻である大君もまた、葵の上同様途中で帰らぬ人となり、さらに物語後半では、男君が長く思い続けていた女君をいよいよ自邸に迎えたことにより、女一の宮が自身の立場に苦悩する点は、紫の上と酷似していると言えよう。もともと、女一の宮と紫の上の人物像は似ているというよりも対照的な存在に近いのだが、この二人の描かれ方にどのような差異があるのかを中心に考えていきたい。

紫の上の扱いが、『源氏物語』の中でも別格であることは、もはや言うまでもないだろう。紫の上の性質は藤壺の宮の完全さに近いものであるが、嫉妬の癖があるのが唯一の難点であると言われている。実際に源氏は、女三の宮を迎えることを伝えるとき、

ちよつとした浮気でも目に角を立てる紫の上がどういった反応をするか大変案じている。いざ打ち明けると、何でもないように振舞って見せる紫の上の対応はさすがであるが、彼女の場合これだけで話は取まらない。婚儀により源氏が三日間、欠かさず女三の宮のもとに通うとき、紫の上が強く思い悩んだ故か、源氏の夢枕に彼女の姿が現れ、源氏は翌朝急いで帰ることになるのである。また、自らの境遇に嘆く紫の上は、以降、度々源氏に対して出家を望んでいることを伝える。このような紫の上の妻としての態度をどのように捉えるべきなのであるか。『源氏物語』の帚木巻における女性談義の内容について思い起こしてみたい。

まずは紫の上の嫉妬癖についてである。左馬頭が、夫が少しばかりほかの女に心を移すことがあっても、それを恨んで、むきになつて仲違いするというのも、これまた愚かしいことだと述べている。その場にいた他の男たちも彼の論に強く納得していることから、紫の上唯一ともいえる欠点は、些細なことと無視できるものではないといえるだろう。また、左馬頭がその後続ける、男の気持ちのほかの女に移つたとしても、当初の情愛を思い、妻をいじらしく思うのだったら、それはそれなりに宿縁深く結ばれた夫婦仲として長続きするであろうものを、そのようないざこざがもとで、縁が切れてしまうものだ、という口ぶりは、後に源氏が女三の宮を迎えるにあたっての、紫の上に対する言い訳を思わせる。

次に女三の宮降嫁後の、源氏に対して出家の願望を伝える紫の

上の態度についてである。先の女性論の直前に、左馬頭は次のように述べている。何かおもわせぶりに恥らつてみせたり、恨み言でも言おうはずのところを知らぬふりに我慢したりしておきながら、忍従の果てに出家を決意するのは、一見同情に値するとみえて、じつは独善的・感情的な愚行である場合がある、と。このように、『源氏物語』において他とは別格の存在である紫の上でさえ、夫の浮気が絡んだ際の態度については問題があることが垣間見える。

一方、『夜の寝覚』の女一の宮はどうだったであろう。男君が女君のもとへ向かうための言い訳をしたり、二人の關係を打ち明けたりする際、気高い沈黙を守る女一の宮の反応はまさに理想的な態度であったことは既に述べたとおりである。すると、身分・容姿・立振る舞い、その全てが申し分なく、おまけに夫の浮気に対する妻としての態度まで非の打ちどころがない女一の宮は、限りなく完璧に近い女性であると言えそうである。

それならば、同時に女一の宮は理想の妻たり得るのだろうか。『源氏物語』の左馬頭は自らの女性論において、万事穏やかであり、恨み言を言いたくなつたら、それとなく匂わせたり、憎からぬさまにそれとなく言うようにしたりするのが、かわいさも増して良い妻であり、大抵の場合、妻の仕向け方次第で夫の心も落ち着くものだと総括している。しかし、度を越して男を好き勝手させておくのも、男からすれば気がおけず、かわいげがあるように思えるものの、その反面、つい与みしやすい女に見られてしまう

とも述べていることに注意したい。女一の宮の態度は、後者の危険性を孕んでいるのである。また、葵の上との比較でも触れただが、高貴であり、重々しい態度故に、男はかえって打ち解けにくく、「さうざうし」と感じてしまうこともある。妻としてあるべき態度をとり続けることが、必ずしも理想の妻の条件であるとは言えない点は皮肉ではあるが、だからこそ『無名草子』に「心上衆」と称される女君や、女三の宮の降嫁によってかえって源氏からの愛情がさらに増した紫の上の、男主人公から最も深い愛情を注がれる女主人公としての格別な魅力が引き立つのである。つまり、女主人公の魅力は、葵の上や女一の宮の存在によって、いっそう引き立たされるのである。

『源氏物語』において、葵の上と女三の宮のいずれも、男主人公である源氏の妻として、致命的な問題や欠点を抱えていた故に、正妻の立場に見合うほどの愛情を源氏から注がれることはほぼなかった。そのため源氏の愛情は、多少の浮気心を除けば紫の上一人にほとんど注がれることになったのである。これは結果的に、紫の上と並ぶほどの女性というのは存在しなかったからに他ならず、『夜の寝覚』の女一の宮との最も大きな相違点であると言えよう。『夜の寝覚』には女主人公である女君に並び立つ存在として、女一の宮が描かれており、男君の心も二つに分かれるのである。この点からも、女一の宮が物語において背負わされた役割がいかに大きく重要なものであつたか理解できる。

結論

『源氏物語』の登場人物との比較によって浮き出てくる女一の宮の完璧さや扱いの大きさについてそれぞれ触れてきた。本文中では出番の限られた彼女の人物像を、より鮮明にすることができたのではないかと考えている。女一の宮は限りなく完璧に近い女性であり、それ故に女君の魅力をいっそう引き立て、同時に女君を最後まで悩ませる存在となる。『夜の寢覚』という作品において、男君の愛情を女君と二分するもう一人の女主人公と呼んでも差し支えない役割を与えられているのである。『源氏物語』では存在し得なかつた役割を持つ女性を配すること。即ち、女主人公と並び立ち、対照的ともいえる魅力を持った女性である女一の宮を描くこと。その点に注目した上で『夜の寢覚』という作品を読むとき、我々はその構造の精緻さに改めて感嘆するとともに、女君が持つ特別な魅力に気付かされることになるだろう。女一の宮という女性は、物語の面白さと、女主人公の魅力を最大限に引き立てる、『夜の寢覚』という作品に決して欠かすことのできない役割と魅力を持った人物なのである。

注

(1) 「……いと幼げにものしたまふめるを、うしろやすく教へなしたまへかし」とゆるしきこえたまふ。宮よりも、

明石の君の恥づかしげにてまじらむを思せば、御髪すまし、ひきつくりおはする、たぐひあらじと見えたまへり。」(若菜上 八七頁)という一文より。『源氏物語』本文の引用は、『新編日本古典文学全集』(阿部秋生ら校注・小学館)を用いる。なお巻名と頁数を末尾の()内に付記し、傍線・傍点を私に付した。

(2) 『夜の寢覚』本文の引用は、『新編日本古典文学全集』(鈴木一雄校注・小学館)を用いる。なお頁数を末尾の()内に付記し、傍線・傍点を私に付した。

(3) 『無名草子』本文の引用は、『新編日本古典文学全集』(樋口芳麻呂・久保木哲夫校注・小学館)を用いる。なお頁数を末尾の()内に付記した。

(4) 『夜の寢覚』(四二三頁)の、女一の宮の容態の快復を喜んだ後に、女君の存在が男君の脳裏をよぎる場面など。

(5) 例えば、はじめは何かにつけて女一の宮のもとを離れて、女君のもとへと通っていた男君の、「またの日も、のどやかにうち語らひ暮らいたてまつりたまふ。」(五〇九頁)といった態度から読みとることができる。

(りようさか・あきひこ 二〇〇九年度本学卒業生)